

貞丈雜記

七之上

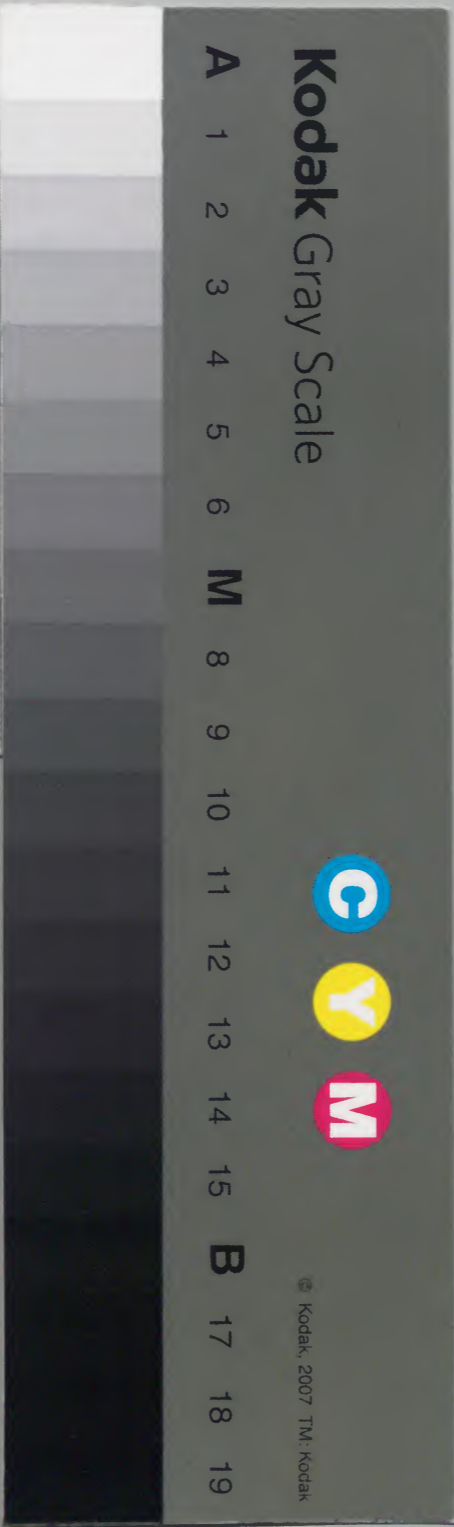
五五〇〇番

庫文閣内				和書類
一五三函	三二册	一四二二號		
一七架				

庫文官政太				和書門
	三二册	一〇八函	二四二號	

内閣文庫	
番號	和 11422
冊數	32 (13)
函號	153 287

禮記



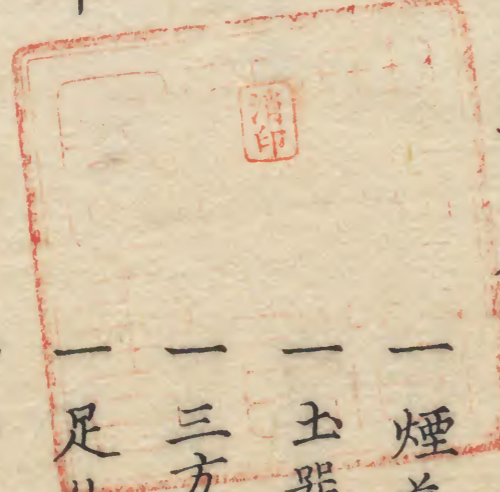


真丈雜記卷之七

明治十二年購求

膳部之部目錄

- 一合子之事
- 一折之事
- 一衝重之事
- 一木具之事
- 一折敷
- 一加んあけ



- 一煙草盆之事
- 一土器之事 ハケ条
- 一三方四方之事
- 一足付
- 一片木
- 一角小角 圖
- 一平折敷 角不切 側折敷
- 一三方四方を用る人品之事

雜記七

目一



- 一菓子盆之事
- 一ふち高之事
- 一重箱之事
- 一箸の臺 圖
- 一饗之膳
- 一三峯尖 ニテ糸
- 一盛形之圖
- 一活てうし立
- 一飯櫃之事
- 一白木膳之事
- 一ちやびの事
- 一むき折お
- 一瓜さ
- 一甲立之事 ニテ糸 圖
- 一高杯之事
- 一行器之事
- 一活をん立
- 一飯ヒ之事
- 一此さのまえ
- 一破子さえの事

- 一塗椀之事
- 一湯か蒸の事
- 一土器之代磁器用事
- 一活鯉取扱之事
- 一心葉の事
- 一高盛之事
- 一ゆきをでの事
- 一懸盤の事
- 一藻か塩分之事
- 一様器之事

酒盃之部

- 一献之事
- 一ニッ盃之事
- 一かがえくまの事
- 一塗盃之事
- 一婚禮盃の事
- 一主客盃先後の事

- 一 世このり
- 一 徳利の事
- 一 鉦子提子蝶形付のり
- 一 祝言之瓶子の事 ニヶ条
- 一 鉦子の柄包むる
- 一 筒之酒
- 一 さく九こんのり
- 一 さく櫛のり 図
- 一 押物のり
- 一 三ツ星五ツ星のり
- 一 酒の中移る
- 一 柳樽の事 ニヶ条
- 一 瓶子置換のり
- 一 鉦子提子山松楊付のり
- 一 鉦子片口両口のり
- 一 高臺のり ニヶ条
- 一 法通のり
- 一 内ぐらうお器のり
- 一 盃臺
- 一 かけ物

一 折の物

- 一 鉦子の柄ある星のり
- 一 勸盃の事
- 一 盃うらぬせゑのり
- 一 削り花の事
- 一 拳固の事
- 一 太鼓樽の事
- 一 食籠物
- 一 殿中一献
- 一 白酒黒酒のり
- 一 さい越酌の事
- 一 鉦子蓋あさる
- 一 酒旛の前の一献
- 一 唐瓶子の事

輿類之部

一 輿四品有之の事

一 棟之輿の事 図

雜記七

目三

- 一 四方輿之事 図
- 一 みせきぬ之事
- 一 輿の心をもんの事
- 一 今世あぶらぎりの事
- 一 籠の輿之事
- 一 車兵輿乗るの事
- 一 一〇〇〇の事
- 一 ちよくまんの事
- 一 塵取之事 図
- 一 輿の下簾 図
- 一 女輿金物之事
- 一 きて延の事
- 一 今世糸物駕籠の事
- 一 糸物と云る
- 一 黄色輿之事
- 一 輿基之事
- 一 檳榔毛車之事

人ヒ

貞丈雜記卷之七

伊勢貞友
 千賀春城
 門人 岡田光大
 校 同

膳部之部

此部飲食之部ト合セ
見ベシ庖丁方ノ事モ入

一 合子ガウシとも合器ゴキとも云六椀の事之身とあるを合を執るの名之
 合器を五匙と書て免くん汁椀平皿つ不さくこく言乃
 五也と云説阿もあやまり之平皿は平皿こく言との物古く毎
 古く免くん汁椀なるを平皿平皿こく言の代り作り
 者免くは免くつ不深きこけ物の代り古くこけ物を用たり

ヒキレト云ハ木モ
 キテ入物ヲ作り免
 故ノ名ナルベシヒキレ
 ハヒキ入レト云ヲ略シ
 タルナルベシ則合子
 ノノ職人尽歌合
 ヒキレウリノ詞ニハ
 イナバカウシニテモ
 入

糸と聞書云三三
 の圖は小ぢうへをせ
 らけ云又膳敷の
 図はてしな四と云
 小ぢうのまゝ
 海人藻菰云鍾ハ
 イカウニ度入三度
 入置也然ニ近代間
 物五度入塞鼻竈
 種々土器令出来
 酒興盛故也
 貞丈云武家ニテ
 ハニ度入ヲ忌也凶
 事ニツ孟三ニ度々
 酒ヲ入故ナリ

折テ乃車と心得る人何れあやまり之折カヲヒツは唐櫃
 あども一合と云ハ一つのより入すて茶碗をハ一合二合と云へ
カハラケ
 一 土瓶品くのり小きをこぢうをカハラケのり小ぢうより大
 あるをニど入と云ニど入より大あるを大ぢうと云小ぢう小對
 する名也さて又ニど入より大ぢう以下三まがりばく大き
 大ぢうより三まがり大あるを五ど入と云五ど入より三まがり大
 あるを七ど入と云七ど入より九度入十一度入十三ど入十五ど入
 何れも云廻りぐ大き十五度入より上ふ大あるハかゝりなど
 入七ど入より上段大あるハ酒りの付着をゆりて出す付
 用多く舊記カハラケのりけ物と有ハ此車之前云屋をかき付

のりを小ぢうと云ハ三度入の内はカハラケ小き土器の扱ある
 三度入ハ孟は用ものりけ之酒ハ孟ハ三度入の扱ある扱大座
 土器をニど入と云大ぢうハ三度入の外は重なり大ある扱大座
 と云五ど入ハ三ど入より大あるを七ど入と云七ど入ハ九度入ハ
 下も同じものりニど入五ど入をい入をい入と云るハあやまり
 隠るハ大きあるハ三度入と云ハ本づき名付する名あり
 一 かくびと云うけけり式膳敷記は大ぢうハもの但そかくびと云
 かくけり然云々貞衡云そかくびと云うけけり有ハサもいやく
 く種何れ 灰やうやく 茶の湯用 肴あどわりて出せ
 一 阿いの物と云うけけりあり大草敷お付書云あいの物ハ三ど入

すりかろを焼く平うすよりふと一 わそしとハわさきあり
ふと一とハ大きあり

一 魚いづらと云うけ有風呂記云此通里の 貴人の市前一召
此酒は下をみ 盃也

平高也北上記云へいづらと云平をきくづけ云あいの物あり



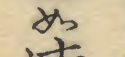
小きうづけ也あの手うづけへ条々同書云まうけのこしづけを

記して平幸あをむりをしてげづの物をまんぢうのあまつむ

べとあをいづらへつづあの手うづけあをれを下張をしそり

むけてこしは五毛の魚類を削りてそりあをまんぢうの形は

高く成く神は供物をもちてなるかづけは平賀 ヒラガ
本字ハ平
籠ト書ク

小壺手壺と云何り平賀ハ  此小壺ハ  此手壺ハ  此

此圖ハ神道類
名目抄ニアリ 此手壺といふお魚いづらあるべし平高と云け

ども平壺あるべし小壺の如くふのけれども強く深うづす

平き故平壺と云ある魚

一 白うづけと云白く焼く今も京の深草焼土佐の尾土

焼 ヤキ あをいづらをぬりたる如く白きうづけあり

あをいづけとも引るけともまてをけともま急はきたぎよ

濁 濁 どのの土器とも酒をのそあををまらるうづけ之を人々

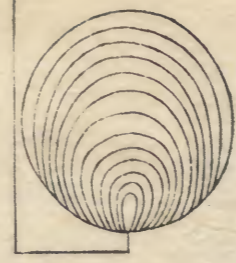
是はあををまてる平人ハさやうみせずあをうづけハ一盃

またそれバ随分おとあき人辨出て酒をのむる旧記可

何りはうづけをあをいれを之常の土器へ替ふるあり

一 ちうの物と云あをうづけぬる之は金箔 キンボク ちうだて エ 繪

人唐記云魚道疑
濁ト云又台記四節
八座抄云疑濁云
本名キヤウダクト云



如此所をひかり
とめと云
供饗ノ事ヲ公卿ト
書タル書モ有供饗
本字也

カキイロ
ヨロツタシオキ
を書きどりしる物ノ萬嗜記ニ云る所の物とヤも云々入
申入是ハ晴の時の表ハ不出物とい女中むきしるを必おさるハ
一戻けつらある物とい殿中ももきしる云々或云云ぬも物ハ
もうの物ノ畧云々是ハ漆ぬりを云

一玉器のひねりともある酌杯記ニ云かいつけは印移りとも云々堅可
必筋有り軍陳門出るといひねりともを前へあつて酒のきぬ
物云々とも筋ありといあるは物ありあらず玉器の底可
うづまきのめくある筋あり片どきと云々筋をひねりとも云
一法いふと云ハ衝重と書て三方四方供饗の熱名へは法いふと云
也上の臺と下の足とをつまらうと云々たる物あるはついでと云々

三方ノ穴を何けるを三方と云四方ノ穴を何けるを四方と云
穴をすもあけざるを供饗と云此之品ハ何れも同一形あり
足付ハ御座の形ハ何れも

一三方四方の下はあける穴を今ハるの事と云古ハげん志
と云げん志をあらると云る上臈名ニ記ハ見ハるげん
志をうとハ眼像と書て眼ハ目也目とい何あるのる目ノ像
といハ引目猪の目と云目の字も皆穴の事と云同意也

一木具と云はまて檜の木ノ白木見作りと云々基も皆木具也
三方四方供饗も木具之類也今ハ足付のる斗を木具と云
一足付ヲ足おと云折敷ハ足をお付する板ハ足付の折敷

雜記七

五

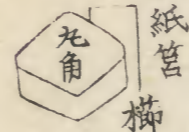
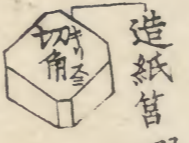
坐しをを畧して足付足打むと云

一折敷ラシキと云ハ足おきを云ハ足付のものを折敷と云事あり
足付の折敷あるが折敷と云あり

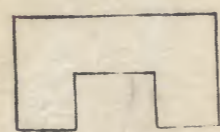
一履きと云ハ板をうすく履きする俵けつぎに作る折敷を云
一めんあけ又うすけとも云ハ履きする板のめんあけをうすけ
うすくし〜げつぎを作る折敷を云

管の角々名色々
有事此名
雅亮装束抄出

一カクの折敷とも又カクとむりも云ハ四角の角を切りし折



加此の形也



足の形ハ此の形なり
折敷ハ此の足付の形を
足付と云今ハ是也と云

一コカク小角と云ハ右の角の折敷を三寸四方ありし中角ハ五寸

四方ありし大角と云ハ八寸四方也是を八寸と云

一平折敷と云ハ四角の角を切りし四角の角也足ハ是角
の折敷のこも足付の形も一用は依敷

一角切と云ハ平折敷の形に東山殿身中折るコシ管領に
引渡角不切と云事あり不不見たり

一そを折敷と云ハ角切と云足ハくりしを云

一今時ハ年始を不堂位無官のいやくき考ふると盤紋三方
は乃を風俗ありし古三方ハ平人の用物なりを盤
ハ折敷又履きとのせりし取并記ハ主人を人の在否

二光院内府記云
盤カク三方大臣以
上四方大納言
以下三方也撰
家ハ不依浅官自
幼少於公界被用
四方族為一人

雑記七

六

第一向右別ノ華
ハ始於清華ノ諸
流於公界可用四
方之由被存故曾
以無其謂所詮於
禁中御相伴之時
清華之大中納言
自前々三方二相
定リハ六争於
公界可被用四方
乎諸家更ニ不河
免之事也於私宅
者大臣之孫子逆
ハ用四方ハ是堅
固内々ノ儀ハ如
老モ内儀之時四
受用理運事ニ疾
若如此之儀被思
疾テ清華之衆
被及異儀哉ト
推量疾細縁之三
方ハ六位藏合用
之ハ公界衆會之
時如私之官女

盃を拵てて出給ふる角の折あるを平人三方を用ひ
是平人ハ三方を用ひざる故也此云々盃の事ハ膳も
人の位は付て定法有り奉り問ふ云公方様拵家門迄大臣家
までハ盃盃四方は使ひりハ大方の公家充三方はすしハ武家ハ
角の折あるは使ひ大臣あるハ公家武家ハ出出の時ハ使ひ
又云相伴の人より膳の替り殿中よりハ公方様拵家門迄
此四方ハ郷ハ三方攝家大臣門迄渡水の時ハ武家の儀ハ付充ハ
配膳も後奏とて殿上人使ひ使ひハ武家の儀ハ相伴の時ハ公方様
此亦四方ハ家大中納言ハ三方武家ハ是付ハ配膳ハ供充又長老
此を付の時ハ公方様も此ときハぬ折あるを挽るとハ長老も同也

上滿分人用細縁
殿上人四位五位殿
衆會之時三方勿論
也

○細縁ノ三方合簿
盤ト云三方ノフキヲ
ヒキタシクル也
元來菓子ハフキヲ
カニルノ本式也貞
順記ニ云菓子盆
ニ菓子ハルノ略儀
也ト見ユ古ヨリ菓子
盆アリ也

法配膳唱食寺一房成の時ハ平人三方を用ひ
奉あやまりあはれと儀知づ

菓子盆と云古ハ菓子ハハチ云々盛也
又まんぢうハハチ云々盛也
又まんぢうハハチ云々盛也

一 ちやづと云奉京極大草紙のの条さんバのおき
とありちやづとハハチ云々盛也菓子盆近代の物
盆の奉をちや川といふあり

一 ちやづハぬちやづの折あると云物ハ折あるを言ふ
菓子盆をもちる為ハちやづを言ふと云ハハチ云々盛也

重箱古ヨリアリ
也貞順色々之記
重箱ト云フアリ大
永天文此書ニ書
ナリ室町殿ノ此
シ物ナレト表向ハ
出サレ物也又節用
集ニ重箱見テ
リ

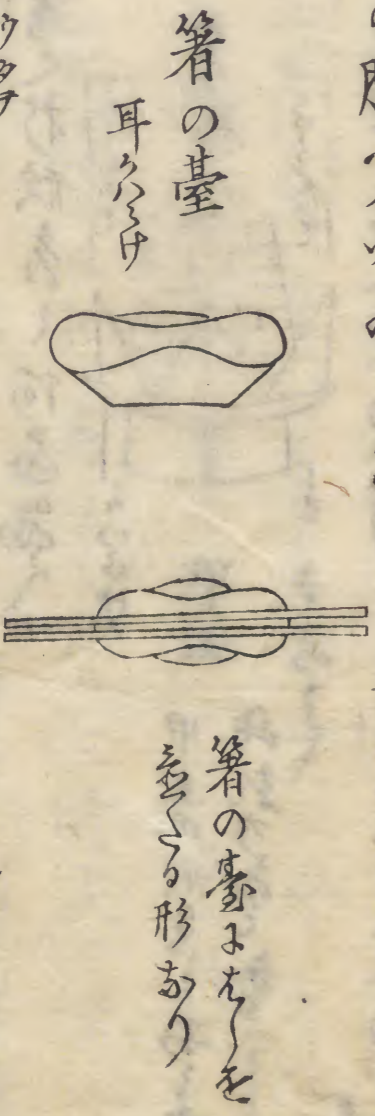
一 胸ちをさ一寸五分をり角切角之廻りカクラを合々
一 むぎ折表と云ハひや表ひや表をゆる折表之又せいろとも
云はふをちやち高をゆるゆる物之今ハ切をむきむ表の
表を梳又ハ皿ハ丸ハ丸

一 今之重箱といふ物ハ古のむぎ折表を学ひる物成テ古々
重箱といふ物ハ部菓子肴などの物を皆折ハ丸ハ丸
猿床のぶんぎうと云キマツケ狂言ハ宿坊うら重の内ガ糸のま
うと云ハバ狂言ハ室町殿の代ハ作りゆる狂言ハあるべ
ず後ハ作りゆる狂言ハあり

一 瓜を糸うすうふうをうすうをうすう糸うすう糸うすう
糸うすう糸うすう糸うすう糸うすう糸うすう糸うすう

紫式部日記
さき内あいのま
らとと少と一の
あいの云々
兼盛集ハ内
のあいのあ
きのたもて云々

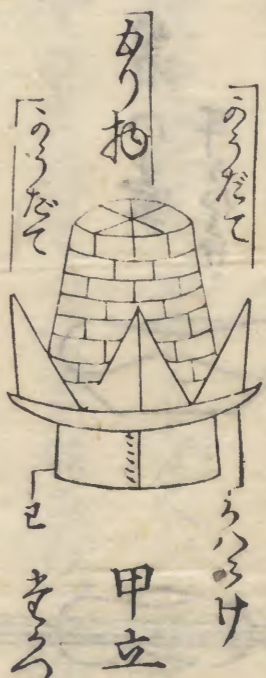
一 箸の臺と云ハさしつけの束之七五三などの膳を
の膳ハ必みくさつけハ箸をおくち
あどよ見へうううをさしとハ楊枝のごと成物之串を
二三分ハ丸くつけづと一方ハ加どを盛ハめんを
一 流ハさえたり
瓜ハウリト書テ和名抄ウのめ
倍ハフリト書ハ何ハまり



一 甲立と云ハ七五三の膳をて式正の膳ハ物をゆる小角
心をうけあどよまり物の廻りハ紙を折形をしてゆるる者

手かけの折り紙
 つけあぐま甲立
 をするハカリお
 のこがれをさる
 ありしるまぐ
 ぐみりまの
 み用はあ
 ずとあぐま

持の折紙を甲立と云也折形ハ庖丁の家の流よりて遠る
 是ハ本名ハ饗立ふれどもゆがだてといひあやまりて甲立と
 書く折紙名ハ何れか



一 饗立を以て食物の饒とするハ上古食物を柏の葉に盛
 ざるよりて柏の葉を表し紙を折て作りおをさる成丁
 一 餐の膳と云ハ飯は餐立をする也一餐の膳と云く
 考そのつぎと云ハ食物をさるゆがだてのつぎは折紙の輪をさるを
 云也ゆがだてと云ハ折紙の字ハ土器茶碗と云ハ折紙をさるゆがだてゆがだて

云也ゆがだてのつぎハ輪をさるゆがだてのつぎは折紙の輪をさるを
 以て大草流の書ハ式三献の折紙言のつぎと云ハ右の土器の
 下はゆがだて物をさる也今付
 下はゆがだて物をさる也今付
 下はゆがだて物をさる也今付
 下はゆがだて物をさる也今付



一 三方膳と旧記ハ書くも何れ三峰尖の事
 一 行器を古き書ハ外居と書くも何れ東鑑三十四云或ハ
 街重外居等屋図為事云ハ江家次第云大臣家大餐





行器図包結記
 二アリ可見合

雑記七

九

一 規式の膳類は白木を用ひ何事も土器は盛るるは是一度
 切用ひて用ひ終て後おそく捨てこれを二度用みまき故に
 これハ神國の風格にて清浄を要す故に神代はかきつけ
 ぶふもあつて食おを柏の葉よりくさくさされ膳類を
 かき捨てとも此故と申傳はり後世よりて白木の膳土
 器などを金銀のちりまをみ彩色をすまおどりか
 して白木土器を用ひ奉意を取らざるはむる者也

一 破子ワリゴさうえと云はり子白木にて拵の如く作りかぬせがよ
 しくる森邊美之形丸くも四角三角も扇形も拵の風
 流より多也かぬせがよとて身も同一深さなる故も方回

一 ぬくあるを以てはる子と名付くうぢいあどもぬく白木
 是れ作り一度切まうけ流しはるくさくさと云はるの箇へ
 酒を入て持てを行を云書体は切くを両方は置て上のへ
 はあかをしめて酒を入る弁ハ葉の葉の枝ある故と云
 一 今時の漆椀ヌリワンの円よりだうとて  此ある物あり是はらつてけ
 の下は輪を並ぐる形を作りける者又つ不ざうとて  此
 ある物あり又ひらうとて  此ある物ありつ不ざう平ざう
 と云物ハ己げ物の形をうけ作りける廻りの細き肋ハ己げ
 物ハつらを入る形  細き輪を云 規式の膳ハ食物を皆土器
 より又物よりてハ白木の己げ物より多く土器の下は輪

以白木を揚器ヤウキと云引入あり至徳記にあり

以上北村季吟が源氏物語抄に

見あり作説に箕形怨菴の説あり貞丈按は盤の多し一物也と云折敷の物也

少の薬器の盤と云ハ茶をうけあり也其物の折敷類の物也

関中又白木を揚器と云引入也と云白木の折敷の物也

いづれも入るは組ある物と云ハ此法説さうあり又中

院通茂卿七十賀

元禄十三年

記は折敷三枚

椽器五蝶鳥

又折敷一

枚椽器瓶子一口椽器と見あり揚器とも椽器とも書也深

氏よまろり椽のなうきとあるハ銀も揚器の取を作らる物

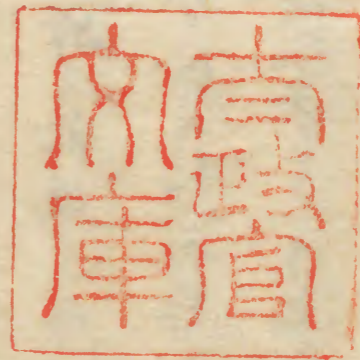
と少の白く椽のやうきありありのゆきうつきとあるをこれハやう

きハ蓋をのまき蓋と云ハ又按揚も椽も此蓋字を用也と

揚の字本ニあるハ折敷類ハ椽ヒキと作るを是ハ揚ヤウキ

の木とて作きて揚器と名付られ椽とて作家類を捨物

と云類の名ハ薬器ヤウキといハ説ハ候あり也



Handwritten text in seal script, likely a library or collection record, located in the center of the right page.

